

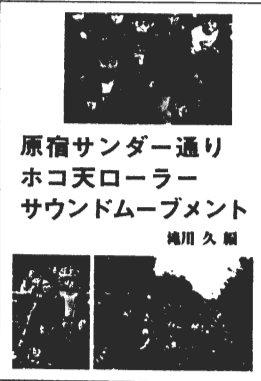
BOOK: 原宿サンダー通り
ホコ天ローラーサウンドムーブメント(滝川久編)

またブームのステージで、いちばん楽しい思い出は88年7月17日のステージではないかと思う。この日は午前雨降り、ホコ天でなくなり、フラワーズといっしょに歩道橋の下にステージをしつらえたのだが、午後には雨も弱くなりやがてあがった。いつものファンに加えて5時もすぎたから外国からの観光客、親子づれの団体がやってきてブームのステージをみつけて、少女たち、黒人の子も白人の子もいっしょになって踊り出した。そうしているとおもしろいことにママさんもいっしょになって踊り出し、そのうちパパさんも加わってたいへん楽しい雰囲気になった。

車道ではないので、6時ピッタリにステージを終わりにしなくともよい。いつもの少女ファンに加えて、黒人や白人の少女ファンが、声をあわせてアンコールアンコールと要求する。ビートルズ(イギリスのロックバンド)のナンバーや、ローリングストーンズ(イギリスのロックバンド)のナンバーをやっても、まだファンは納得しない。宮沢が「皆さんも踊ってください」といっても踊ろうとしない。「とうとうツェッペリンまできました」といって、レッドツェッペリン(イギリスのロックバンド)のナンバーをやって、暗くもなってきたので、これでもう終わりということで、ふだんは少女ファンの多いところでは宮沢はあまり煙草をすわないのだが、煙草に火をつけて、おしまいおしまいと態度で示していると、黒人や白人の少女が次々に握手してくれとやってきて、煙草をすうところではなく、てんやわんやになった。

黒人や白人の少女ファンは海をこえてブームの思い出をもちかえって、日本のおみやげとして海のおむこうの友だちに話して、歌って、そして踊ったことだろう。

原宿は歩いていき
きみは近くにあって
ぼくは立ちついて
ばかりの勇氣を見つめていた
時間は天国であった
暇くことはない
みんな!



原宿サンダー通り
ホコ天ローラー
サウンドムーブメント
滝川久編

原宿サンダー通りホコ天ローラーサウンドムーブメントの文化は、日本のそして世界の横断界において、さまざまな形でとりあげられている。ただ、その状況を概観すると、原宿サンダー通りホコ天ローラーサウンドムーブメントの最良質な面、最鋭敏な面が、どこまで正確に把握されているかということ、皮相性、分散性、一時性といった報道姿勢の脆弱性が見受けられ、ローラーサウンドムーブメントの文化を総合的に、そして多角的な視座でまとめあげ、同時代に有効であるとともに文化史研究の史(資)料として、後世においても十分な価値をもつであろう文獻、その他は残念ながら多くはないように思われる。もっともローラーサウンドムーブメントの文化は基本として“音”の文化であり、それを活字を中心にした媒介で、どれだけ、そのほんとうのところを表現できるのかという問題があることは確かである。だが、それに取って眺みかかってきたのが、この書籍であると自負したい。この書籍が同時代に文化の問いかけを発すると同時に、未来永劫にわたって、人類の文化の展開に寄与するものになることを心から願い願う。(刊行にさいして)

はるふ出版発行 清水弘文堂書房発売
B5版 200頁 定価2400円(本体2330円)

できあがったものへの宣伝文をチャチャラ書くのはお仕事ライターにまかせて、できあがる前の混とんかげんを見事に伝えることが実は大事なことで、それを伝えられるひとはそうは居ない」とフジヤマの渡辺正さんが「SOS」Vol.40に書いておられるけど、この本を読むと、まさにできあがる前のバンドの混とんかげんが見事に伝わってくる。混とんとしているって、実はいろいろな方向に向かっていることのできるエネルギーに満ちていることなんだなって思えてくる。それと「刊行にさいして」(左のコピー参照)に書かれている「原宿サンダー通りホコ天ローラーサウンドムーブメントの最良質な面を見事に伝えている。この本の81ページ、ブーム(THE BOOM)の88年7月17日のライブの部分(左のコピー参照)などは、よくその最良質な面を見せてくれて、私はこの本の中でいちばん好きなお宝である。ここを読んだら誰だって「海のおむこうの友だちに話して、歌って、踊って」いる黒人や白人の女の子たちの姿が目につくんでくるにちがいない。それから、135ページの「88年10月10日(日)ホコ天なしくもり」から188ページの「90年」12月24日(日)ホコ天なし晴」まで54ページにわたって書かれてあるほとんど「毎日曜、祭日の出演バンドやパフォーマンスの記録がすばらしい。太陽の光、風、雨、砂がまこり、ゆれる様々。音楽をやっていた人たち、パフォーマンスをやっていた人たち、音楽をまいていた人たち、そしてそういっただけを見ていた人たち、それらが全部で天国を創っていた。一本の道路をみんな天国にした。記録を読むとそれがわかる。

原宿の歩行者天国にいったことのある人も、行ったことのない人も、この本を読むと、それぞれに、このすばらしい天国に遠く想いを馳せることができる。「刊行にさいして」に「原宿サンダー通りホコ天ローラーサウンドムーブメントの文化は基本として“音”の文化であり、それを活字を中心にした媒介で、どれだけ、そのほんとうのところを表現できるかという問題があることは確かである」とある。確かに原宿歩行者天国のサウンドムーブメントの基本は“音”であるだろう。しかし、その“音”即ち音楽のさまざまな力が見事にとらえられているので、私には活字や写真とおして音楽がきこえてくるし、原宿歩行者天国が音楽を基本にした天国として本という形で定着されているのが、なによりうれしい。この定着された天国には収穫できる実が、いっぱいいっぱいになっているような感じがする。バンドをアイウエオ順に並べて編集してあることと、バンドを原宿歩行者天国での活動だけから書いていることからわかるように編者・滝川久氏の各バンドに対する視点が、きっちり定まっているのには感服。それと、いくつかのバンドには編者だけでなく、ファンの人やバンドの人などの文も載っていて、それが原宿歩行者天国を、より立体的に感じさせられとても興味深い。

この本に私の文も載せてもらったおかげで、この本のこと、そして編者・滝川久氏の原宿歩行者天国での存在と働きを失知ることができ、深く感謝しています。ベンジャミン ボイラース ボンクラ マッドボーイズ メロライト UBタッパス 乱 リモート ルードクラフト レジェンド ロックス ロンドンズ ワイヤー 和気孝典とギャングランズ ワンナイトスタンズ(以上載っているバンド)

BAND: NATURAL(ナチュラル)

NATURALというバンドの音楽について書くのは、とてもむずかしい。たとえば、どこかの山道をおもいでいたとするでしょ。そして崖のあたりに花がさいていて、それにとて心ひかれて、その花にみじれていたとするでしょ、いいなあ、それいだなあって。とてもいい気分になって、にこにこして足どりもかるくなる。だけど、その花のことをひとに教えたくて、どんな花だったか説明しようとする、とてもむずかしくてお手あげになってしまう。なぜかっていうと、私はその花の名を知らないうち、絵もかけないからなの。そうなる、どうしてもその花のことを教えたからしたら、その人をその花のところにつれていくしかない。NATURALの音楽もその花みたいなよね。きいたら、あ、歌う、てこういことなんだなってすぐにわかる。そして、とてもいい気分になって、にこにこして、生きる足どり)がかるくなる。NATURAL(ナチュラル)以外にバンド名が考えられないくらいナチュラル。NATURALの“SHINING ON THE MOONLIGHT”という歌に「夜の星を探してたあかぬい真だれもが天使の翼をもってた」というところが「あるんだけど、ヴォーカルの人はステージの上ではいつも天使の翼がはえてるよ。ジーンズにジャンパー、野球帽、天使に会いに1940コロレトシティーに行こうね!」(大きくて木目) 代々木

WORDS: ケラ(ROOF TOP 1992.4月号「オイラとロフト」より)

高2の時、RCサクセッションを観に来て以来、テクノ、ニュー・ウェーブを中心に数えきれぬライブをロフトで体験した。有頂天で、土曜の昼の部に初めて出演させてもらった時の嬉しさは今でも忘れない。その後、有頂天はもちろん、ソロ・ステージや空手パカボン、クレイジー・サーカスといったバンドでこのステージを踏ませて頂いた。私が主宰していたナゴム・カンパニーのシリーズギグ「ナゴム・ナイト」でも随分とお世話になったし他人のステージにゲスト参加した回数だって両手に余る。こんなにも度々ロフトにやって来てというのに、なんというかその、つかずはなれずといった関係が続いている。でも私はロック人間ではないので、ロック的な付き合い方が出来ないのだ。例えば、ライブの後に店員さんやお客さんと飲むのも嫌ではないのだけれど、なんかこう、照れくさくてどうしたらいいかわかんないのでした。でもまあ、これはこれで良いと思っている。ナアナ LONG VACATION・6% 浅谷エッグマン 7% 浅谷ONAIR 8% 浅谷クラブアクトロ ケラ

